
君とズット

雨音未波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君とズット

【Z-コード】

Z5312C

【作者名】

雨音未波

【あらすじ】

兄を追って異世界へと降り立った少女。そこで見つけたものは、少女を幸せにするか不幸にするか…。運命は廻り始めたのだ。ゆつくりと…誰にも気づかれないように…。

第一話 始まりは訪れて（前書き）

またまたファンタジーです。読んで下さると嬉しいです。
そして感想等があればどうぞお書き下さい。

第一話 始まりは訪れて

今を生きている。

私達は…今を生きている。

負けないよ、きっと……強くなつてみせる。

だつて約束したよね。

離れないつて。

覚悟してよ。

またすぐここに来いに行くから…。

「朝妃——…帰る——…」

茜色に染まる空の下、其処には一つの影が浮かんでいた。

建物の中に紅が混ざる。

「先帰つて——あたしまだやる事あるから——…」

一つの影が動き、手を振つて、もう一つの影が居る方向とは反対の方へ歩いて行つた。

残つた影も手を振り、反対の方向に歩いて行く。

朝妃……。

彼女の名だ。

淡い栗毛色の、肩より長い髪が特徴的だ。

瞳は日本人独特の黒。

吸い込まれそうな闇の色……。

朝妃はある場所へ向かっていた。

それは……。

彼女が今まで探していた場所……。

見つかった時は、まさかこんな身近に、しかも学校の中に在るなど、思いもしなかった。

向かう先は……。

……学校の地下。

カツン……と、地を歩く音がある。

肌を刺すよつた寒さ。

外は春で、気候は暖かいのに、此所だけ気温が下がり、肌寒い。

寒さに身を震わせながら、先を歩く。

歩いた先に見えたのは、大きな古びた頑丈そうな扉。

朝妃は足早に扉に近づき、重い扉を両手でゆっくり開ける。

ギギギ…と鈍い音が響き、完全に開けられた扉を背にしてまた歩き出す。

遠くに見えたのは…。

「……鏡」

「…朝妃の体全てに入る程に大きな鏡があつた。

ゆっくりと近づき、まだ新しそうな鏡に触れる。

鏡は全く汚れていなく、埃一つ付いていない。

疑問に思いながらも、ツウ…となぞる。

指には埃は付かない。

「誰かが手入れしてるのかな…。…不思議な鏡…」

でも…お兄ちゃんはこの中に入つたんだ。

実は朝妃の兄…涼は、一年前から行方不明になつていてるのだ。

書き置きの手紙もなく、家族や警察は一年間探し続けた。

そしてやっと見つけた。

朝妃が…この鏡を。

涼はこの中に入った。

証拠に、見つけた時涼のピアスが鏡の前に置いてあつたんだ。

朝妃は確信した。

涼は鏡の中に入ったと。

だから兄を連れ戻す為に、自分も鏡の中に入る決意をした。

両親にも、友達にも内緒で。

「……お兄ちゃんって本当勝手だよね。まったく……」

ふう……と小さいため息を溢し、腰に手を置く。

そして意を決したように瞳を鏡に向け、両手を近づけた。

自分も入れるか分からぬけど、やつてみなくちゃ分かんないんだから。

両手の指が鏡に触れる。

その瞬間……。

何の前触れも無しに、その指が吸い込まれるようにして鏡の中へ入つていった。

「つ……！」

怖い。そう強く思った。

だがここは負けちゃいけない。

一度瞼を閉じ、一つ深呼吸をして、ゆっくりと体を入れていった。

肩まで入り、足も入れる。

最後に顔を入れ、やっと体全部が鏡の中へと入った。

そして体が浮く感覚がして、味わった事のない浮遊感に目眩がする。

咄嗟に瞼を閉じて、されるがままに流れしていく…。

その間に、あまりの気持ち悪さに意識を失いそうになつたが、何とか堪えた。

しかしそれは無駄なものとなり、朝妃は静かに意識を手放した……。

第一話 出逢いは突然

「うわあああ……！」

ざわついた街の中、ある男の悲鳴が響きわたった。

通行人は足を止め、悲鳴がした方へと顔を向けた。

其処には悲鳴を上げた男と、もう一人……。

薄い赤色の髪に、薄紫色の瞳。

薄い赤色の髪は太陽の光によつて煌めいてゐる。

薄紫色の瞳は鋭く男を見つめている。

男は片手に銀色の銃を持ち、座り込んでいる男の額に銃口を向けて

いる。

「やつと見つけたぜ、時間かけさせやがって」

「うつ……ゆ、許してくれ……」

グッ……と銃口を強く押しつけた。

指を動かす……。

その時……。

二人の上空が輝いた。

もの凄い光に、二人も周りに居た通行人も目を閉じる。

「ぐつ…何だ…?」

銃を持った男が呟いたと同時に、突然男の上に何かが被さった。

「ふわー…せん…」

「はつ?」

自分に重みがかかる。

そして聞こえた声…。

男はそのまま後ろに倒れ、呆然と砂ぼこりがかつた正面を見つめる。

何も見えず、ただ分かるのは胸の辺りに何かの体温を感じるだけ…。

そしてやつと砂ぼこりが無くなり、状況が把握出来るよひとなつた時……。

「……」

男は絶句した……。

開いた口が塞がらない。

ただ目を見開くしかなかつた……。

「あいたー……。こいつ……どうなつたの……？」

えつとー……。

此所……異世界？

あれ？

あたし異世界来れたの？

だって周りに居る人見た事ない人達だし、髪の色とか瞳の色とか違うし。

…あたし…異世界に来れたんだ…！

やつたあ…！

此所にお兄ちゃんが居るんだ…！

よしそー…やつと決まつたらやつやく…。

「……う、うわあああ…！」

「えつ？」

変な服着た人が走つてつちやつた。

しかも凄い顔であたしを見てきたよ？

「ううん……」

「ううん……」

「……おー」

「ん？」

「下から声が……。」

「……え？」

「逃げ、重いんだけど」

「……」

あたし…何見知らぬ人の上に跨がってるの?

何してんの!?

「へえ、この街す、」
「めんなさこ、…すぐ退きますーー!」

あたしはすぐに男の人から離れ、地面に立った。

男の人は心底嫌そうな顔をしながら立ち上がり、服を払った。

あたしはその行動を眺めていたが、自分の目的を思い出して辺りを見回した。

「へえー、この街す、」
「めんなさこ、…すぐ退きますーー!」

んて…て、馬鹿あたし

お兄ちゃんを探しに此所まで来たんでしょう？

探しに行かなーとーー！

てかこの世界のお金も無いし、買い物出来ないってー！

よしーじゃあ行きますかーー！

「えつと、あつすいませんでしたー乗つかつちゃつてー以後気をつけますーではー！」

男の人にお辞儀をして、回れ右をして歩いた時……。

後ろから腕を掴まれた。

「え？」

「何～まだ怒つてたり……。

「…お前…どうして…お前…」

「…ア…ア…？」

「…こみゅ…」

「獲物逃がしちまつたじゅねーか……せつと見つけたんだぞー……どうして…お前…」

「…お前…どうして…お前…」

「…ア…ア…？」

「…えええ…」

「…お前…どうして…お前…」

「何者つて……」

言つていいの？異世界から来たつて。
でも信じてくれる訳ないよね。
どうしよう……。

「おい、聞いてるのか？」

顎を掴まれ、上を向かせられた。

薄紫色の瞳と皿が合づ。

……綺麗な瞳……。
髪の色と合つてるし、それこその人美形すぎや……。
かっこ良い……。

「…何だよ、ジロジロ見とじやねー」

つて…あなたが上を向かせてるんでしょー!?

自分勝手だし…!

「せ、離してだよー。」

「質問に答えるよ、じやなれや離れなれ」

「…この人意地悪だ…！」

見ず知らずの人にこんな威圧して！

自分勝手だし…怖いし…

ええーん…!

お兄ちやん…!

「なああんたさ」

「はつ？」

横から数名のガラ悪そうな男達が、意地悪なこの人に話しかけた。

この人達も怖い…。

此所は不良の集まりなの！？

「その子と知り合い？」

そう言ってあたしを指差してきた。

あたしの顎を掴んでた手が離れ、男の人はガラ悪そうな男達に向き直った。

「知り合いじゃねーけど、何？」

「知り合いじゃねーならこの子よりかよ」

「「ま？」

男の人と声が重なった。

「か…よ」せつて句で？

行きたくないし…

「何でお前等にやらなきゃいけないんだよ、こいつは今俺が用ある
んだけど」

「名の知れたあんたのようなハンターが、こんな餓鬼みたいな女に
何の用があんたよ、いいから黙つて渡してくれねえか？」

餓鬼！？

ちよつと…あたしこれでも17歳ですけど…！

餓鬼って呼ばないでくれますか！？

デリカシーが無いんだね！此所の人達は…！

「嫌だつたら？」

男の人の声が変わった。

「ヤソと口端を上げ、楽しそうに相手を見下ろす。

そして怖いくらいに低く呟いた。

「お前等みたいな下等生物に、誰が渡すかよ。なんならお前等が牢屋行くか？」

「…おいおい、甘く見んなよ。いくらお前が有名だからって、…数えてみろよ。死ぬぞ？」

確かに…向こうは四人。
こっちは男の人一人。

勝てるの!?

「はつ…死ぬのはお前等だ」

男の人気が告げた瞬間…朝妃の目の前から男の人気が消えた。

そう…文字どおり消えたのだ。

何処行つたの!?

朝妃が辺りを見回した時…。

「さやああああ!」

四人の内の一人の男の声が響いた。

見ると其処には……。

血を流して倒れている男……。

その隣には、さつきの男の人が剣を片手に佇んでいた。

鋭く光っている剣先には、赤黒い血が付いている。

「つ……」

あたしは咄嗟に顔を逸らした。

む……酷すぎる……。

女子高生が見るのじゃないつてばー！

「あやああ……」

「えつ？」

また悲鳴が……。

ブシュツ……。

「あやあー！」

二人の男が血を流して倒れていた。

いつの間に……。

残るはあと一人…。

最初に突っかかってきた男だけ。

男はビクビク震えていて、逃げ腰だった。

…情けない。

あんな事言つてたのに…。

「う…うああ…」

怯えている男に男の人気がゅっくりと近づき、正面で止まった。

そして不気味な笑顔を男に向け…片手を上に上げ、振り上げる。

「うわあああああつ……」

あたしは瞼を強く閉じた。

次に何が起こるか分かつてたから。

もう見たくないから。

「駄目ーー！！！」

……え？

「うわーー、レインお前ーー！」

「駄目だよカムイーー！人殺しちゃーー！いくらハンターだからってさ
つー！」

……ええと……空耳じゃないよね……。

何か…男の子…？
の声がする。

あたしはそろ一つと瞼を開けてみる。

予想通り…、剣を持った男の人に抱きついてる見た事ない男の…子
？人？が居た。

二人争ってる様子。

「殺してねえよ！氣絶させただけだ！見れば分かんただろ…？」

「分かるけど…」人の事は殺そうとしたでしょ！目が本気だった
よ…」

そう言つて座つて怯えている男を指差した。

「本気で殺すか馬鹿……つか離れるよ……」

べりつと男の子……を引き剥がす男の人。

ううん… 美形が二人言い争つてる。

貴重だなこれ。

何て感心していた為、背後から近づく影に気づかなかつた。

第三話 始まり物語

「ひやつー」

後ろからこきなり腕を掴まれた。

朝妃の声に美形一人はこちらを向く。

「お前つこいつの間ひつ…」

「あつーおーーーその子放せよーーー」

あたしは…何故かさつきまで怯えて座り込んでた男に捕まっていた。

あんたまだ動けたのねー!!

何て感心しないで…。

「あ…と短いため息と共に、後ろに居る男に怒声を浴びせる。

「ちょっと、放してよ。腕痛いんだけど」

男は震えていたが、腕の力は弱めてくれそうになかった。

「」の女は持つて帰るんだよ…隙を見せたのが悪かつたなお前等
「…」

持つて帰る…?

ふざけないでよ…!!

誰があんたなんかにお持ち帰りされなきやいけないのよ…!!

「放して…聞いてんの…?」

「おい」

ビクリと男の体が震えた。

男の人がもの凄い低い声で呟いたから。

「そいつ放せよ、ほんとに殺されてーのか？」

鋭く光つた薄紫色の瞳が男を捉える。

男はその声にまた怯え、腰からナイフを取つた。

その瞬間。

あたしは男に肘打ちを食らわした。

うつと、ぐぐもつた声が聞こえたが気にせず、振り向いて腹に一発。

ドスッと鈍い音が聞こえたと同時に、男は目を白くして下に倒れた。

「まつたく…放してつて言つた時に放してよ」

パンパンと手を叩いて、美形一人の方に振り向く。

二人は固まつてあたしを凝視している。

…あ、ついやつちやつた。

「えつと…」

まずは周囲の人々に謝らなきやね！

「お騒がせしてすいません…もう大丈夫ですか…」

あたしは頭を下げながら周囲の人達にお辞儀をしていく。

周囲の人達も固まつたままだ。

まずいと思い、あたしはすぐに美形一人に向き直り、頭を下げる。

「助けてくれてありがとうございました！…ではこれで…」

ダッシュでこの場所から離れよつとした時…。

「…あつ待つてよ…！」

後ろから抱きつかれてしまった。

「ええ…？」

な、何！？

あたしは金髪の美形に抱きつかれてた。

「怪我とかしてないの？？」

「へ…？」

「怪我…？怪我なんてしてないけど…。」

「大丈夫だよ」

「そつか…良かつた！」

「ううう…そんな瞳で上田遣いしないでください…！
かつこ良いから…！
いや可愛いから…！」

と一人葛藤していると、剣のカチンッといつ音が聞こえた。

見ると、どうやら剣を腰に収めた音らしい。

男の人はこちらを向き、歩いてくる。

あたしに抱きついた男の子は、それを合図に離れた。

「カムイ、無事だつて。カムイが守つたからだよ」

「レイン、そりやつて無闇に抱きつくな。つたぐ…」

カムイとレイン…。

薄い赤色の髪をした男の人がカムイで、金髪の可愛い男の子がレイン。

カムイはあたしに視線を向け、小さなため息を吐いた。

「お前…今のは凄かつたな、女のくせにやるな

「えつ？」

「もうだよ……むつきのは凄かつた！一瞬の内にあいつ倒しちゃう
んだもん…！」

ああ…それは…。

朝妃は、実は父から武道を習っていたのだ。

痴漢撃退用に。

それがこんな所で役に立つた。

「ねえ！名前何ていうの？教えて！」

「えつと…朝妃…」

「アサヒ？ 可愛い名前！」

いえ、あなたの笑顔の方が可愛いです。

「カムイ……アサヒと一緒に連れて行つてもいい？」

「ええ！？何言つて……」

「また襲われた大変でしょ？一緒に行こう！アサヒ！？」

ପାତ୍ରବିନ୍ଦୁ

あたしはお兄ちゃんを探しに来たんだけどな……。

一人は危ないけど探しやすいし……。

……」
は断つておこう

「あのう……」

「ああいいぜ」

えつー?

「お前は言つ事聞かないからな、それに……俺もこいつに聞きたい事
あるし」

カムイはあたしを見つめ、そして倒れている男に目を向いた。

「こいつ等を警役所に送つたら俺の家に行こう」

「うそー。」

レインは満面の笑顔で頷くと、あたしの手を取って走り出した。

「ちよー…

「行きアサヒー。」

えっと…………あたしひつなるんだるい。。

お兄ちゃん……行く先不安です……。

無事お兄ちゃんを見つかられるとこにねえ。

そして三人は出逢い、始まつていいく…。

運命の糸が、絡まり始める

…。

第四話 私の想い

朝妃、カムイ、レインの三人は、警役所（日本で言えば警察署みたいな所）に行き、さつき氣絶させた男共を渡していた。

そしてよく分からぬが、布製の袋を貰い、しかもジャラジャラ言ってたからお金かな？

とにかくそれを貰つて、三人はカムイの家へと足を運んだのであつた。

⋮

着いた先は馬鹿でかいホテル。

何十階あるのか分からないうて程の大きさ。

こんな所にカムイは一人で住んでるのか。

凄いな…。

などと感心していると。

二人の姿が無かつた。

「アサヒー！何してるの？早くおいでーーー！」

ホテルの出入口の所でレインが手招きをして待っていた。

「あつ待つてよーーー！」

あたしは走つて一人の元へ行つた。

：

カムイが鍵を開け、中へ入る。

次にレインが入つて、あたしも入る。

中は予想通り凄く広くて豪華だった。

感無量。

言葉にならなかつた。

こんな部屋に一人で住んでいるカムイはどんなだけ金持ちなのか知りたかった。

固まっていると、またレインに呼ばれ、慌ててあたしは扉を閉め、二人が座っているソファーアへと移動した。

「二人共座つてー！僕飲み物持つてくるからー！」

そう言つてレイン君はキッチンがある方へと駆けていった。

てか……この人と二人きりは気まずい……。

色んな意味で……

やだなあ早く帰つてきてレイン君……！

「そんなとこ突つ立つてないで座れば？」

下からカムイの声がした。

横目でカムイを見ると、頬杖をつきながら窓の外を眺めていた。

あたしは渋々カムイの前へと腰を降ろす。

その時にバツチリ目が合つた。

薄紫色の瞳があたしを見つめる。

吸い込まれそうになる程に、妖しく…そして深い。

あたしはそのままカムイの瞳を見つめていた。

カムイは無表情で朝妃を見る。

そして静かに口を開いた…。

「お前は…」

「えつ……」

カムイの声に朝妃は現実へと引き戻された。
しかし視線はぶつかつたまま。

「お前は…… 一体何処の国の奴だ?」

「……それは……」

……言える訳ない。

信じてくれないよ。

全く違う世界から来たなんて……。

きっと笑われるだけだ。

だったら……。

「…カムイ…さん」

カムイの眉間にピクリと動いた。

朝妃はそれを見逃さなかつた。

カムイの顔を見つめていると、段々とカムイの表情が怪訝そうな表情になつていく。

朝妃はそれを見て、何か悪い事言つたかなあと、思考を巡らせていた。

しかし答えは分からず、カムイの返事を待つ事にした。

「カムイさん…？」

「あつ…嫌だつた？」

成る程。さん付けで呼ばれたのが嫌だつたのか。

朝妃は理解した。

だったら……。

「カムイ……？」

チラ見をするようにカムイを見る。
カムイはさつきよりは幾分マシな表情をしていた。

ああやつぱり……。

朝妃は納得した。

彼はさん付けが嫌だつたのだと。

「それでいい。で……アサヒ……だつたか？何故お前はあの時、上から
降つてきたんだ？」

ドクン…と、心臓が強く鳴った。

冷や汗もかいてきた。

もひ…話すしかないのだろうか。

朝妃は暫く考へ、そして決意したよひにカムイをまつすぐ見つめる。

「……あたしは、お兄ちゃんを探しこきたの」

「兄を…？」

カムイは眉を潜める。

しかしそれ以上は何も言わなく、朝妃の次の言葉を待つた。

「うん…此所に居る事は確かなの。だからあたしは探しにきた。お兄ちゃんを見つける為に…」

朝妃が話している間、カムイは何も言わず、ただ黙つて朝妃の言葉に耳を傾けていた。

「だから…。」

だから？だからあたしは何を言おうとしているんだろう。

何が言いたいんだろう。

本当は、こんな所に居ないで早くお兄ちゃんを見つめないといけないのに。

急がないといけないのに…。

「アサヒ?」

黙りこくつた朝妃を不思議に思い、首を傾げるカムイ。

朝妃は俯いて下唇を噛んだ。

瞼を閉じて…思い出す。

兄の姿を……。

「うん…どうしたの兄ちゃん」
「朝妃。俺さ…」
…

あの日…いつものように兄の部屋に遊びに来ていた朝妃。

しかし朝妃は気づいていた。

兄の様子が変だと…。

敢えて何も言わなかつたのは、朝妃なりの優しさ。

兄から話してくれるのを待つていた。

朝妃は兄……涼が大好きだつた。

他の誰よりも涼が…。

それには理由があるのだが…。

朝妃達兄妹は、本当はあの両親の子供ではない。

本当の両親は、まだ一人が小学生の頃に事故で死んでしまつた。

朝妃が小学三年生、涼が小学六年生の時に。

二人は両親の死から立ち直る事が出来た。

それは……たつた一人の血の繋がつた家族が居たから。

今育ててくれている両親は、本当の両親の親友。
その人達に貢われた。

それから一人は、上手く生活してきたつもり。

たまに壁を感じる時があるが…。

しかしその時には涼がいる。

だから朝妃は頑張つて生活できた。

涼が居たから…生きてこれた。

別にあの両親に不満はない。

大事に育ててくれる。

優しい。

でも……せつぱり寂しい。

そんな時支えになるのは…涼の存在。

たつた一人の家族の存在。

そんな大事な涼が何か悩んでいる。

力になりたい。

朝妃は心の底からそう思つ。

でも無理強いはしない。

だって嫌われたくないから。

兄が全てだから……。

「…………いや、やつぱ何でもない」

「ええ？ 何それ。変なお兄ちゃん

「ははは……」めんな

……それから2日後、涼が消えた。

第五話 抱くそれは

あたしの全て……兄の存在。

それなのに涼は……消えたんだ。

あたしに何も言わないで……消えた。

泣いたんだよ？お兄ちゃん……。

涙が枯れるまで泣いた。

でも涙つて枯れないんだよね。

いつまでも流れる。

だから泣けるだけ泣いたの。

大好きな兄を想つて。

一年間……探し続けた。

だけど何処にもいなかつた。

何処にいるの……？
お兄ちゃん……。

……また、泣いた。

そして……やつと見つけた。

お兄ちゃんの足跡。

学校の地下…こんな所に入つて、お兄ちゃんは何がしたかったんだ
るい。

疑問に思つたが、今はそんな事どうでもいい。

お兄ちゃんに会える。

一年ぶりに会える。

嬉しいよ…お兄ちゃん。

あたしは誰にも秘密で鏡の中に入つた。

言いたくなかったんだと思ひ。

両親はもう死んで…友達には嘘をついたが無理だった。

言つ勇気が湧かなかつた。

だから黙つて行く事にした。

きっと今向こうでは、あたしも既なくなつて凄い騒ぎになつてゐるん
だひうな。

でもいいの。

そんなのどうでもいいの。

あたしは……お兄ちゃんに会える事が嬉しそうだから。
他のものは見えてなかつたんだね。

だつてあたし、何も持たないで来りやつたから。

制服で来て、唯一あるのは携帯。

それだけ。

だからねえ……お兄ちゃん。

早く出でましょ。

会いに来たよ。

あたし来たよ。
会いに来たから。

だから……。

会いたいよ……お兄ちゃん……。

……気持ちがふらつとしてる時に、カムイに出会った。

レインに出会った。

偶然の出会い?

ううう……今のあたしにはどうでもいい事だ。

だつて二人共、他人だから。

他人なんだよ？

構わないで欲しい。

あたしは一人で大丈夫なのに。

お兄ちゃんだけ居ればいいの。

だから近づかないで。

干渉しないで。

お願いだから……離れてよ。

「アサヒ…？」

「…」

名前を呼ばれた瞬間、朝妃は拳を握りしめた。

そして勢いよく立ち上がる。

カムイは突然の朝妃の行動に驚いたが、すぐに冷静さを取り戻し、朝妃に尋ねる。

「アサヒ、どうしたんだよ。アサヒ…？聞いてるのか？なあ…」

「……たしに構わないで……」

「え？」

小さすぎてもう一度聞き返す。

それに苛ついた朝妃は大声で叫んだ。

「あたしに構わないでよっ！－！」

走り出す。扉に向かつて。

後ろでカムイが何か叫んでいたが気にしない。

全力疾走で扉に向かつた。

何も考えず、ただ兄の事だけを思つて走つた。

あたしがいとな時にも兄の事を考へてしまつたが、呆れた。

自分はこんなにも兄が好きなんだ。

お兄ちゃん……お兄ちゃん……。

泣こわやいひや……だかう呼べ……呼べ。

会いたい……。

あと少しでドアノブに手がかかりそうだったのに。

邪魔された。

カムイに…。

カムイの手が、凄い音を立てて扉に触れた。

朝妃はその音に驚いて固まってしまったのだ。

身動きが取れない…。

すぐ後ろには…カムイが居る。

とこ…動けても出られない。

何故なら扉は、部屋から出る時は引く仕組みだからだ。

カムイが押さえてるから扉は開けられない。

結局逃げられない。

もっ…どうしようもない…。

朝妃は下を向いた。

微かに肩を震わせている。

カムイ…。

何か言つてよ。

黙つてないで…ねえ。

朝妃は両手を握りしめた。

その手を、左手をカムイは勢いよく引いた。

そのせいで思い切り後ろに振り向かされ、朝妃は目を大きく見開いた。

が、上は見上げない。

カムイと目が合つから。

合いたくないから。

しかしそんな朝妃の中の抵抗は虚しく、カムイは朝妃の顎を取り、上を向かせた。

瞬間。

何かが触れる感覚。

唇に…。

暖かい何かが…。

頭の中が真っ白になった。

何も考えられなくて、カムイのされるがまま。

しかしあと頭が覚醒し、朝妃はカムイの胸を叩いた。

しかしそんな事でカムイが離れる訳はなく… 余計深いキスをされた。

唇の隙間から舌を入れてくる。

瞬時にカムイの服を握りしめたが、止めてはくれなかつた。

クチュ…と淫らな音が耳に届く。

抵抗しても意味がなく、朝妃はもう自分で止める事も出来なかつた。

「ン…ふ…」

微かに漏れる吐息。

頭が朦朧としてきて、いつしか握りしめていた手の力が緩んでいった。

段々と息苦しくなってきて、ドンドンと強くカムイの胸を叩く。

「んンッ…んッ…はッ…」

唇がゆっくりと離れた。

一人の唇の間に薄い糸が引く。

厭らしくそれは煌めいていた。

「はあッ…はあ…」

思つように息が出来なかつた朝妃は、苦しそうに呼吸をし、肩を上下に動かせる。

カムイは辛そうな、けれど何処か冷たそうな瞳で朝妃を見つめていた。

朝妃はそれでもカムイを見れなかつた。

しかし逃げる事は出来ない。

カムイの片手が朝妃の腰に回り、逃げないよつに固定してあるから。

仕方がなく朝妃はカムイを見る。

その瞳に怒りを込めて。

「な……何するの…? いきなりキスなんて…」

「……アサヒ」

カムイの声は掠れていて、何処か厭らしかった。

胸が高鳴る。

感じた事のない感情。

初めて抱いた感情に、朝妃は戸惑つた。

この感情を……どう表現すればいいの?
?

第六話 沢山の疑問

初めてのキス。

あなたの顔が近くにあって、何も考えられなくて。

頭の中が真っ白になった。

分からぬ……どうしてキスしたの？

理由を教えてよ……。

「何で……？」

やっと息が整ったので、上目遣いでカムイを睨み付けた。

しかしカムイは朝妃の瞳に臆する事なく、冷たい眼差しで見据えた。

カムイの瞳は何処か怖い。

朝妃はブルッと身震いし、思わず視線を逸らすと上からカムイの手

が伸びてきた。

そしてまたカムイの顔が近づいてきて、唇が触れるか触れないか辺りまできた時。

一つの何かが割れる音が響いた。

ガシャアアンッ

「「ー?」」

二人は顔を離し、一斉に音のした方を見る。

二人の視界に入ったのは…。

顔を赤面させ、体を硬直させて立っているレインの姿があった。

音の原因はカップが割れる音。

レインの持っているおぼんからカップが三つ落ちたのだ。

フローリングに敷かれていた白い絨毯が茶色に染みとなつて広がつていいく。

未だ放心状態のレインに、カムイは短いため息を吐くと、朝妃から体を離し、レインの方へと歩いていく。

朝妃は、やつと解放されたという事を理解したと同時に、扉に手を掛けよつと体を曲げよつとしたら……。

「…フ…?」

体が動かなかつた。

まるで金縛りにでもあつたよつな感覚。

全く動じないとしてくれない体に驚きを隠せず、言葉を失う。

カムイは朝妃を気になどしなく、レインへと言葉を掛ける。

「レイン…カップが落ちてる」

ため息混じりにそう告げ、しゃがみこんで割れたカップの破片を捨
いあげる。

数秒後、レインはハツとして、カムイと朝妃を交互に見た。

「…カムイ…アサヒ…」

朝妃は驚愕の表情を浮かべたまま固まつていて、カムイは下で破片
を拾っている。

どちらを助けようか悩んだ結果、カムイを手伝つ事にした。

暫し沈黙…。

しかし、その沈黙に耐えきれなくなつたレインが、遠慮そうにカムイの服を引っ張る。

カムイは拾つの一時的に止め、レインを見た。

「…アサヒに何したの？もしかして…」

キスの事は敢えて聞かなかつた。

聞きづらいのかなのか。

だから朝妃がああいう状態になつた事を聞いた。

しかしレインは勘づいていた。
カムイが朝妃に何をしたのか。

「……ああ。力を使つた」
「何で…」

「…………」

カムイはたまによく分からぬ行動を取る。

何の為に。

何故そんな事を。

今まで共にいたレインでさえも頭を抱える悩みだった。

そして今も分からぬ。

朝妃の動きを封じる意味が。

力を使う意味が。

「アサヒが可哀想だよ、いきなり力を使われたらセ」

「… そつか？」

「えつ？」

カムイの予想外の言葉に目を丸くするレイン。

カムイの真意がまったく分からなかつた。

「あいつは何処から來たかも分からぬ奴だ。普通の女じゃないかも知れないだろ？何か力を持つてゐるかも知れない…秘めた力つてやつをさ」

「そんなのつ…もし抵抗する力が無かつたらどうするんだよつ！現にアサヒは抵抗しないじゃん！」

「ああ… そうだな」

チラリと横目で朝妃を見て、また下に顔を向け、破片を拾いはじめた。

カムイの態度に腹が立つたレインは、勢いよく立ち上がり、朝妃へと向かつていつた。

カムイはレインの行動にため息を吐き、呆れた表情をした。

「アサヒ……大丈夫っ！？」

レインは朝妃の側まで行き、朝妃に向かつて手を翳した。

すると……レインの手から淡い白い光りが現れた。

光りは朝妃を包むように広がり、一層輝きを増した後、スウ……と消えた。

朝妃は固まつたままレインの一連の動作を見ていた。

ふつ……と体が軽くなつたのを感じた朝妃は、すぐさまドアノブに手を掛けた。

しかしそれもまた、阻まれた。

今度はレインの手によつて。

レインが朝妃の手首を掴んで、出でいくのを止めた。

「レイン君……」

レインは朝妃よりも少し背が低かったので、朝妃はレインを顔を下に向かせて見た。

「待つてアサヒー！お願いだから出てこるのは待つてー。」

懇願するような眼差しで朝妃を見つめると、朝妃は困惑したような表情になり、ゆっくりとドアノブから手を離した。

それを見たレインは、ホッと安堵のため息を吐き、朝妃の手首から手を離す。

微笑みながら朝妃を見るレイン。

そして…。

「アサヒ……話したい事があるんだ。だから出てこるのは…

「…ん」

小さく頷くと、それを合図にレイ恩は朝妃の手を取り、歩きだす。

それに朝妃は素直に従つた。

もう逃げられない事は十分に分かつていたから。

だから今はおとなしくしておく。

……これから、お互にから予想もしていなかつた事が話される……。

第七話 存在

その部屋だけが、音を無くし、深い沈黙に包まれていた。

その沈黙を破ったのは、驚きの声を上げたレインだった。

「アサヒは…異世界から来たの…！？」

「うん…お兄ちゃんを見つける為に…ね」

朝妃は苦笑し、俯いた。

まだ信じられないという表情をしているレインとは反対に、カムイは至つて冷静な表情をして、朝妃に問い合わせた。

「それでアサヒは兄を見つける為に自分の居た世界とは別の世界…此所に来たって訳か。という事は…アサヒの兄がこの世界に居るという事だな。しかも一年前から…」

「お兄ちゃんは一年もあたし達の前に現れなかつた…最初はびっくり

りしたよ。『んな…異世界が存在してたなんてね』

朝妃は初めから全部一人に話した。

本当は話したくなかったのが本心だが、話さない訳にもいかなかつた。

二人がしつこく聞いてきたから、抵抗出来なかつたのだ。

そして今に至る。

「でもアサヒのお兄ちゃんは凄いね…普通の人間なのに、一年も此所で生活してるなんて」

落ち着きを取り戻したレインが、一人の話へと入ってきた。

「普通の人間つて…こっちでは言葉も通じてるじゃん。別に生活するのには問題無いんじゃない?栄えてるみたいだし?」

「ううん…この世界は今、乱れてるから…治安がつて言うのかな。アサヒ、男達に攻められたでしょ?カムイが居たからあの時は助か

つたけど、カムイがいなかつたらどうなつてたか…」

あれは… 所謂ナンパってやつじやないの？

確かにあつちでもしつこいナンパは居るけど、治安が乱れてるつて

…。

そんなにやばいの…？

「今この世界では、治安を安定させる為に、ああいう奴等を捕まえる人達が派遣されてるんだ。その人達の事をハンターって呼んでるんだけど」

「ハンター…？」

朝妃の居た世界では聞かない単語に、首を傾げる。

異世界ワードってやつだ。

「治安を守る為に動いてる人達の事だよ。犯罪になるよつな事をした奴等を捕まえて、警役所に持つて行くんだ」

「警察官の仕事みたい…」

「ちょっと違うんだ。ハンターはそれ以外でも、魔物とかを狩つたりする。被害をもたらす魔物だけね」

「まつ…魔物おおおつ…？」

朝妃は声を荒げた。

また異世界ワードが出てきたから。

魔物なんてあっちの世界では無縁のものだつての！
怖すぎだつて…！！

「あれ、知らない？魔物」

レインは首を傾げ、小さく笑つた。

その問いに朝妃は首をブンブン縦に振る。

「魔物なんてあたしの世界にいないもんつーー」つちよつは平和です！！」

「あつそつなんだ。良いねー平和なんて」

平和かどうかは分かんないけど、魔物なんていう物騒なものは居ないからーー！」

魔物が出たら世界問題だよーー！」

戦争とか起こるんじやないーー？」

なんて頭を抱えてる朝妃を、レインはきょとんとした顔で見ていた。

カムイは一人のやり取りを面白そつに見ながら、紅茶を啜っている。

「あつそれで話を戻すけど、ハンターはそういうものを退治して、世界を守ってる。ハンターになる人は、結構な力が無いとなれないんだ。みんながみんなれる訳じやない」

「じゃあ一人はーー」

上田遣いで前に座つてゐる一人を見る。

レインは「クンと頷いて、口を開いた。

「ハンターだよ

やつぱり…。

朝妃は納得した。

だってカムイはあんなに強かった。

ハンターになつてゐる可能性は十分に高い。

レインは何處か天然ぽい雰囲氣があつたが、カムイとは随分仲が良
いっぽいから、ハンターになつてそだと思った。

もちろん朝妃の予感は的中。

二人共ハンターだつた。

「ハンターつて良い役職なんだよね。お金沢山貰えるし、でもその

分忙しいし、命に関わるような仕事だけだ

と言つて苦笑したレインを見て朝妃は、何故か一人が心配になつた。

そんな危ない仕事をし続けて大丈夫なんだろうかと。
確かに一人は強いと思うけど、命に関わると聞いて凄く不安になつた。

同時に、一人がハンターにならないといけない理由も頭に過つた。

ハンターにならなきやいけない理由。

それは辛い過去を物語つているんじゃないかと。

しかし朝妃はその事について聞けなかつた。
聞いちやいけないとthought。

一人のものだから。
過去とか人生とか。

部外者が口を挟んじやいけないから。

そこは黙つておく事にした。

そしてもう一つ。

兄…涼の事。

この世界は危険と判断した朝妃は、普通の人間の兄が凄く心配になつた。

こんな世界で一年も過ごして、もしかしたら今、危険な目に遭つてるんじゃないかと。

考えたくないが、もう命が……。

朝妃はそこで考えるのを止め、そんな考えを拭いざるよつに頭を振つた。

考えたくない。

兄が一生居なくなつてしまふなど、一番考えたくない事だ。

兄は朝妃のたつた一人の血の繋がつた家族。

そんな大切な人が居なくなつたと思つと、悲しすぎて涙が出てくる。

涙を一人に見られないように、下を見る。

段々と視界が歪んできた。

もう……限界だつた。

「つ……う……」

朝妃は声を押し殺して、泣いた。

「えつ？ アサヒ！？」

朝妃が突然泣き出した事に焦つたレインは、ソファーから立ち上がり、朝妃の横へと移動して肩を抱いた。

しかし朝妃は泣き止まなかつた。

余計涙を流してしまつた。

それではまた焦り始めたレイン。

背中を優しく撫でてあげた。

「うう……ふうわああん……！」

「アサヒ……」

レインが優しく声を掛ける。
しかし朝妃はまだ泣き続けた。
制服のスカートを強く握りしめて。

「……アサヒ」

前からとても優し気な声がした。

顔を上げると、歪んだ視界に映つたのは……。

優しく微笑んでいるカムイの姿。

その微笑みに、朝妃の胸はトクンと波打った。

カムイは表情を変えず、続ける。

「俺達も兄を探してやる。だから泣くな……な?」

その言葉に……表情に……朝妃はまた泣き出してしまった。

嬉しそぎた。

カムイが何故そんな事を言つてくれたのか理由は分からぬが、凄く嬉しかった。

優しい……。

自分の隣でこいつやって肩を抱いて、背中を撫でてくれるレイインも、優しくて頼もしい言葉をくれるカムイも。

二人は凄く優しい。

ありがとう……。

朝妃の心は、嬉しさで満たされた……。

* カムイSIDE

アサヒが、レインの言った言葉に泣き出してしまった。

原因はきっと……命つて言葉。

兄の事を思い出しちゃったのだらつ。

確かにこの世界は危険だ。最近は、人に危害を加える魔物も多く出てきた。

だから普通の人間の…アサヒの兄はこの世界にいると非常に危ない。

いつ殺されてもおかしくなかつた。

きつとアサヒは、兄が死んでしまつたかもしないと思つたんだろう。

だから泣いた。

泣いたアサヒを見て俺は…言つたんだ。

兄を探してやると。

自分でも何故そんな言葉が出たのか分からなかつた。

ただ…重ねてしまつたんだ。

泣いているアサヒと……昔の自分の姿を。

その時に思った。

アサヒを守りたいと。

笑わせたいと。

俺は… 独りがどれだけ辛いか痛い程分かる。

だから……。

傍にいてやりたいと思つたんだ。

アサヒは俺の言つた言葉に、また泣き出してしまつた。

つたく… お前は泣き虫だな。

…だがアサヒ。

頼むから… 昔の俺のようにはなるなよ。

辛いなら俺達を頼れ。

惑わされるな……。

アサヒ……。

お前には…人生を無駄にしてほしくないから。

「レイン、いいか?」

聞くだけ無駄だろ?けど、一応聞いた。

案の定レインは、満足そうに微笑むと、深く頷いた。

俺はレインに微笑むと、またアサヒを見つめる。

アサヒは未だ泣いていた。それも大泣き。

その姿を見て、俺は小さく笑ってしまった。

…大丈夫だ、アサヒ。

不安になるな。

俺達がいるから…。

カムイは、今まで持たなかつた新しい感情に気づく事はないまま、アサヒが泣き止むまで見守つていた…。

三人の心が繋がつた。

それはまだ…始まりにすぎなかつた。

しかし今は…この「おひさぎの時間」にいてもいいだらう。

これがひどい。沢山の苦惱の日々が待っているのだから……。

第八話 異世界の仕組み

「氣つ…術…？」

やつと泣き止んだ朝妃は、泣きすぎてしゃっくりをしながら、カムイに言われた言葉を繰り返し呟いた。

「ああ。氣術つて言つのは、そいつの特別な力の事を言つ。魔法みたいなもんだが、少し違つんだ。炎出したり水を出したりしないからな」

「魔法より進化した、魔法より強い力だよ」

カムイの言葉に補足するように付け足したレインを、朝妃はカムイと交互に見やつた。

…一人はそんな力を持つてるんだ。

凄いなあ…。

カムイ達から聞いた話は、力…氣術の事。

先程カムイが朝妃に使つた封じの力は、まさしくそれだった。

聞けば、二人の氣術の力は上級者に入るらしい。

とても強いと言つ事。

しかし、強くないとハンターの仕事は務まらないそうだ。

確かにそう。

強くないと、犯罪者や魔物に敵わないから。

犯罪者の中にも、氣術を使う人がいるらしい。

氣術に反抗出来るのは、同じ氣術を持った人達だけ。
だから氣術を持つてない人達もいると言う。

氣術を持つている人達は、珍しい存在だそうだ。

何だか頭が混乱しそうな話だが、朝妃はやつとの思いでついていつた。

「じゃあ… 魔法はこの世界に存在しないんだね？」

「氣術がメインだからな」

カムイが頷きながら言った。

「例えば氣術ってどんな力なの？カムイは封じつて言う力しか使えないの？でも剣使つてたよね？銃だつて持つてるの見たよ？…どういう事つ？」

疑問に思つていた事を一気に話し、息継ぎもしなかつた為、朝妃は少し息が乱れてしまった。

カムイとレインは、朝妃の質問の早さに驚いた顔をしたが、すぐに微笑んで朝妃の質問に答える。

「氣術って言つのは、さつきも聞いたよね？その人の特別な力の事

つて。例えば……やうだなあ……」

レインが顎に手を当て、考える動作をする。

そして何かひらめいたように、手をポンッと叩き、楽しそうな笑みを浮かべた。

「それじゃあ、カムイと僕の力を見せるよ……それでいい?」

「レイン……」

呆れたようにカムイが名を呼ぶと、レインは、分かつてますと見てカムイを見る。

次に朝妃に向き直り、自分の両手を広げ、天井に向けた。

朝妃はこれから何が起きるのかと、内心めちゃくちゃドキドキしていた。

レインの手を見つめる。

すると…。

レインの手が、淡い白い光りを纏つた。

白い光りは輝いたまま、レインの手から離れてていき、その後凄い速さで天井へと向かつていった。

光りが天井へ激突。

あまりの速さに、朝妃は声を上げる隙がなかつた。

呆然と天井を見る。

天井はビリビリと揺れたが、破壊する事はなかつた。

朝妃はゆっくりとレインに顔を向ける。

「…い、今…何したの？」

「あれが氣術だよ。自分の氣を一ヶ所に集めて、放つたんだ。ただ

し今のは力を抑えたんだよ。天井壊れちゃうし」

レインは苦笑すると、カムイを見る。

カムイは冷たい眼差しをレインに向けていた。

「大丈夫でしょ？ ねつ？」

天使の微笑みのような笑みを貰えば、誰だって何も言えなくなってしまう。

もちろんカムイも例外ではなく……。

「ああ……そうだな。けど別に力を出さなくとも良かつたんじやないか？ 口で説明出来る」

「ならカムイ説明してよー。僕説明苦手だし……」

「ふうと、頬を膨らまして、顔を横に向かせた。

そんな仕草も、レインだつたら可愛く映る。

カムイは軽く苦笑すると、朝妃を見た。

朝妃はまだ天井を見つめていた。

「アサヒ」

突然名を呼ばれた為、体をビクつかせてカムイを見た。

「氣術についての説明だけど、氣術って言うのは文字通り、自分の氣を集めて攻撃するんだ。氣術の色は人それぞれ違うから、レインは白だし、俺は赤だ」

「…へえ…そつか…凄いね…」

さつきのがあまりにも衝撃的だった為、薄い反応しか出来なくなつ

てしまった。

「俺が使った封じも、氣術だ。氣術をアサヒにかけた。だから俺の力は封じだけじゃない、他にも沢山の使い道がある。色々な奴が色々な使い方をしている。俺は剣に纏わせて使ったり、銃に纏つて弾として放つたり」

「僕は剣しか扱えないから、手から出す事と、剣に纏わせて使つてるよー」

カムイの横から身を乗り出し、自分の主張をしたレインに、カムイはまた呆れ、ため息を吐いた。

「…カムイは、剣と銃…両方扱えるの?」

「ああ。その二つでハンターとして生活してる」

「凄いね…一人共凄すぎ…」

こんな凄い人達と一緒に居て、朝妃は自分がカムイの上に落ちた事を、深く神に感謝した。

治安も悪いし、気術と言ひ得体の知れない力も存在している世界で、もし犯罪者などに捕まつたりしたら… 今頃自分の命は無かつたんじやないかと思うと、ゾッとする。

落ちたのがカムイの上で本当に良かった。

「だが気術は使いすぎると、体に負担がかかるんだ。特殊な力だからな。使いすぎは良くない」

「でも僕達の気術は上級者並だから、そんなすぐには体に負担はかかるないよ！だから楽だよね～カムイ！」

レインはカムイの体に抱きついた。

「けど俺達にも限度つてものがある。あまり使いすぎると、レイン。お前はいつも無茶をして…」

「分かってるつて～！それくらい！僕の精神力は強いんだからさつ！心配いらないよ～」

カムイはやれやれと呟き、レインを体から無理矢理引き剥がした。

「ねえ……」

「うん? 何アサヒ」

レインは体を朝妃の方に向き直し、テーブルの上に置かれている紅茶を啜つた。

「二人は剣を扱えるって言つたよね? カムイは銃も。いつも犯罪者や魔物を捕まえる時に氣術を使つてるの?」

「そんな事無いよつ普通に戦える相手なら氣術無しで大丈夫だし。ただ氣術使える犯罪者とかが相手なら、仕方なく氣術使うけど。それ以外は別に……ねえ?」

レインは一通り話しあると、カムイの方を向いた。

「そうだな。氣術使える奴だつたら氣術使って戦うけど。魔物は氣術なんて使えないし、いつもは普通に氣術無しで戦つてる。魔物とかが強い奴ならどうするか分かんねえけど……」

「確かに」

レインは軽く笑った。

「そつかあ…」

二人は、気術を使わなくても強いんだね。

使つたらもつと強くなる。
本当に凄すぎだよ、二人共。

何て、朝妃が一人を見ながら感心していると…。

ガアアアーンッ！！

「！？なつ…何今の音！…」

下…詳しく言えば玄関辺りから、もの凄い破壊音が響いた。

「何か来たね、カムイ」

「ああ。つたく…誰だよ」

「平和なんて言葉を知らない人でしょ？」

「…だな」

二人はニヤリと、不気味そうな笑みを互いに向けると、一斉にソファーを立つた。

「えつ？ ちよつ…二人共！？」

一人状況についていけない朝妃は、混乱してしまい、交互に立つている二人を見た。

「アサヒ。絶対に下に降りて来るなよ」

「ついて来ちゃ駄目だからねついい？」

「えつ？一人共…何処行くの？もしかして…」

朝妃は勘が鋭い方だ。

鈍い一面もあるが。

しかし今は確実に気づいていた。

二人がこれから何処へ行くか。

「見に行つて来るよ。何があつたのか気になるし」

レインはまた天使の微笑みを、今度は朝妃に向ける。

朝妃はレインの微笑みを見た途端、一気に顔が赤くなつた。

…か、可愛い…。

そんな笑顔見たら何も言えないよ…。

朝妃が顔に両手を付け、固まっていると、一人はその間に走つて部屋から出て行つてしまつた。

「…あつ…一一人共…！」

バタンと扉の閉まる音が聞こえた。

行き場を失つた朝妃の手は、固まつたまま動かない。

朝妃はため息を吐き、手を降ろす。

「二人共…大丈夫なの？」

不安が体に染み渡る。

一人が強いのは、今までの話を聞いてきて良く分かった。

だから無事に帰つてくると思つけど……。

やつぱり心配。

来ちゃ黙つて言われたけど……でも……。

……やつぱり行く……

心配だもんつ……

朝妃は勢いよく立ち上がり、部屋を出て、音がした方へと駆けて行つた……。

第九話 衝突

カムイとレインが玄関近くの大きいホールに駆けつけた時……。

目の前は砂ぼこりや瓦礫の崩壊によって、全く辺りが見えなかつた。

砂ぼこりの中で聞こえるのは、数々の悲鳴や破壊音。狂つたように笑う声も聞こえる。

これは……大事になつてゐる。

すぐに片付けないとやばいと、一人は一緒に悟つた。

「カムイ……敵の数は……」

「……ざつと十人はいるな。 けど余裕だろ?」

ニッと歯を出してレインに笑うと、レインはまた天使の微笑みをカムイに向けた。

「余裕すげやるよ。…じゃあ早く片付けよっか」

今度は小悪魔のような笑みを浮かべると、カムイはその笑みを合図に頷き、二人同時に走り出した。

二人はそのまま別れ、左右に走つて行く。

段々と姿が見えなくなつていき、一人も砂ぼこりの中へと音も立てずには消えていった…。

…

「うつわあ…。酷すぎこれ…」

朝妃が見た光景は、カムイやレインが見たものと全く同じだった。

カムイ達がこの中へ走つていつた数分後、朝妃も此所へ到着した。

しかし来なければ良かつたかなあと、少しだけ後悔した。

朝妃はこの中へ入つて行く勇気が無かつたのだ。

凄い悲鳴も聞こえるし、下品な笑い声も聞こえる。

絶対に行く勇氣は湧いてこなかつた。

「どうしよう…カムイとレイン君はもうこの中だよね…どうしたら
一つ！」

頭を抱え、一人葛藤していると…。

ドカッ！

「痛つ！」

突然前から何かが吹つ飛んできた。

見るとそれは…氣絶している女人。

額から血を流していた。

「ちょつ…大丈夫ですか！？しつかりして下さい…！」

体勢を整えて、女人の体を揺さぶる。

女人は何も言わなくて、死んだように氣絶したまま。

それでも必死に呼び続けた。

「ちよつと…！田を開けて下さい…！」

「どうやら朝妃は、女人が死んだと思い込んだのだろう。

田尻に涙を浮かべている。

「起きて下さいよお……ねえ……」

「くえー。『んなト』にまだ女が居たとはな」

前から男の声がした。

顔を上げると……。

片手に剣を持ったツンツン頭の男が歩いてきた。

剣は血で濡れていた。

「あんたが……この人を？」

朝妃は睨みながら言づ。

男は「一ヤ一ヤしながら朝妃に近づいてくる。

あと一メートルという所で男は止まつた。

朝妃はずっと男を睨み続けている。

「しかも結構可愛いな、あんた。殺すのもつたいない」

「質問に答えてよーあんたがこの人をこんな風にしたのー?」

苛々した。

こいつはムカつく。

腹立つ!!

朝妃の悪い奴リストに、こいつが載つた。

人をこんな風にしておいて、あんたはへラへラと何なのー? 謝んなさいよー!!

「やつだけど?」

カツと熱くなつた。

体が震えてくる。

朝妃は言い様のない怒りに包まれた。

拳を握りしめ、思に切り睨む。

「最低……」こんな事して楽しい!? 言つとくけどねー一つこんな事する奴は馬鹿しかしないんだよつーあんた何様のつもりよーーー」

朝妃曰く、日本でも不良の奴は馬鹿だと思っていた。
ところが朝妃は不良みたいな無駄に煩い奴等が大嫌いだった。

だからこいつも不良みたいに暴れてるから、馬鹿だと確信した。

「ははっ。威勢の良い女は好きだな」

「なつー? ちよつとあんたねーー」

もう一度文句を言つてやるつとしたら、目の前から男が消えた。

「え……何処？」

朝妃はキヨロキヨロと辺りを見回す。

「此一所」

グイツ

「……ひょっ……」

声がしたと思ったたら、男はもう朝妃の横に来ていた。
腕を掴まれ、立たされる。

そして抱き締められるように、片手を腰に回され、もう片方の手で
朝妃の顎を捉えた。

「へえー…。やつぱ可愛いな。あんた」

「放してつー変態ーー！」

必死に抵抗するが、男は余計力を入れて朝妃を引き寄せた。

「やつ…！」

男の顔が一段と近くなつた。

意外に男は整つた顔立ちをしていて、美形だつた。

そんな顔が近づいてきて、朝妃は顔を真つ赤にした。
もうキスが出来そうな距離まで来ていた。

朝妃は男を睨み付ける。

しかし男は全く怯える様子はなく、笑い出した。

「その瞳、誘つてるから」

「えつ？……ん！？」

不意打ちで、男にキスされてしまった。

朝妃の唇と男の唇が激しく重なる。

「んう……はつ……んつ」

少し唇が離れた時に息をしても、すぐにまた唇が重なる。
文句を言ってやりたいのに、言えない。

朝妃は男の胸を強く叩いた。

すると男は瞳を開けると、その妖しい瞳を細めた。

突然舌が入つてくる。

「んつ……んんつ……」

胸を叩こうとしたら強く抱き締められ、肌と肌が密着しきりて、叩けなくなってしまった。

もう朝妃は男のされるがままだった。

「んつ…や…はあ…んン…！」

段々と行為は激しくなっていき、朝妃の頭は朦朧としてきた。

力も抜けてくる。

しかし反射的に涙が溢れてきた。

涙は溜まり、強く瞑られた瞳から流れ出た。
それは頬を伝い、落ちる。

嫌だつ…やめて…!
苦しい…つ。

不意に男が唇を離した。

二人の唇の間に厭らしい糸が引かれる。

男は朝妃の濡れた口を親指で拭つと、意地悪な笑みを浮かべた。

「名前何？」

「はあつはあつ……」

今までまともに息が出来なかつた朝妃は、肩を上下に揺らし、必死で息を整えている。

「ねえ……」

男が朝妃の耳元で囁くと、朝妃の体はビクリと揺れた。

朝妃は、下を向いていた顔を上に上げる。

朝妃の顔は火照つていて、唇は濡れ、瞳は虚ろで、どこか厭らしかつた。

男は朝妃の頬に触れ、優しく撫でる。

朝妃は顔を背けて抵抗したが、頬を掴まれ男と目が合った。

吸い込まれそうになる。紅い瞳を見つめ、朝妃は固まってしまった。

カムイよりも濃い赤色。

引きずり込まれそうになってしまった。

カムイ……助けて。

心の中で朝妃は願う。来てくれると言つたから。

「名前……何て言つの？」

「朝妃……」

小さな声で答えた。

言わないと何をするか分からなかつたから……怖かつたから。

「アサヒね。俺はハクビ。なあ……これからさ……」

ハクビが言い終わらない内に、遠くで何かが放たれる音が聞こえた。

聞こえた瞬間に、ハクビは朝妃を連れて横へ飛んだ。

朝妃達が居た場所に、バスケットボールの大きさぐらいの塊が飛んできて、それは二人の横を通り過ぎ、瓦礫に当たった。

瓦礫は大きい音を立てて崩れ去っていく。

朝妃はその光景を、黙つて見つめていた。

ハクビは喉奥でくつくつ…とくぐもった声を出し、飛んできて方向を見つめる。

「やあつと登場かよ。…遅いぜ、カムイ」

「…カムイ…！」

朝妃はハクビの腕の中で、ハクビと同じ方向を見る。

遠くから……砂ぼこりの中から何かが歩いてくる。

段々とそれは近づいてきて、姿が露になつていく。

すると……砂ぼこりが晴れた。

見えたのは……。

……そう。

あたしは、一生この光景を忘れないだろう。

見た瞬間、体が凍りついた。

……言い表せない程のもの凄い怖い形相をしていて、鋭い睨みを効かせ、人一人二人……いや、もっとだろう。殺せるぐらいの目付きで

あたし達を見つめているカムイの姿…。

全身に、淡い赤い光りを身に纏つて……。

思わず朝妃は息を止めた……。

第十話 戦闘

今この状況は…非常にやばい。

やばすぎる。

だつて…だつて…カムイがめちゃくちゃ怖いっ!!

ハクビに放してもらいたいけど、せっかく力を入れて押してもビクともしないし、逃げられない。

攻撃しようと思つても…何か…隙が無いと言つか…。とにかく無理だらう。

だから…カムイに助けを求める!

「カムイっ!! 助けて!!」

此方に向かって歩いてくるカムイに助けを求める。

しかしカムイは表情を変えず、朝妃に何か言つ訳でも無く、ただ歩いているだけ。

無視ですか…?

何か言つてよーーー

「カムイー、邪魔すんなよ。これから良い所だつたのにさ」

チュツ…と頬に軽いキスをされた。

「なつ…！？何すんのよつ…！？いい加減にして…！」

「何だよこれくらいで…もつと激しい事した仲なのにつ」

ハクビは朝妃にウインクを捧げた。

途端朝妃は顔を真っ赤にする。

例えるならそれは林檎のような赤さ。

今の朝妃にはそれが一番似合つだらう。

「ばつ…馬鹿…！？何言つてんの…？」

「ハクビ」

突然カムイが口を開いた。

朝妃とハクビは同時にカムイを見る。

「……死ぬ覚悟は出来るだろ？」

カムイが言い終わつた瞬間。

視界からカムイが姿を消した。

そしてすぐに聞こえたのは、剣と剣がぶつかる音。

朝妃の目の前で、二つの剣が交わつた。

キンッと、剣特有の音が響く。

ハクビは朝妃を放し、両手で剣を支えた。

朝妃はその隙に、一人から遠ざかつて崩れた瓦礫の近くに移動する。

「…カムイ…」

カムイは剣に赤い光りを纏つてゐる。

聞いた氣術だろ？

カムイの氣術は赤色だつて言つてたから。

ハクビは氣術を持つていなか、剣に変化はない。

二人の戦いは、朝妃にどのような結末を見せるのだろう。

未だに一人は睨み合つたままだ。
見ていて恐怖を感じる。

「カムイ…勝つて…つ」

朝妃は顔の前で両手を握り合わせ、目を閉じて祈つた。

その間に、一人は戦闘を繰り広げる。

カムイが剣を交えたまま、左足を素早く回してハクビを蹴る動作をする。

それに気づいたハクビは、ヒュウッと口笛を吹き、軽々と避け、後ろに飛んだ。

しかし逃げる時間を与えないように、カムイはすぐさま走り出し懐から愛銃を取り出して、氣術の弾丸を一発放つた。

ハクビはもう一本の剣を取り出し、氣術の弾丸を跳ね返す。

その隙にカムイは距離を埋め、ストレートの蹴りをかました。

もろに蹴りが当たったハクビは、少しよろける。

次にカムイは腹に向けて蹴りを入れ、その衝動にハクビは後ろへと
もの凄い速さで吹っ飛んだ。

ハクビはそのまま崩れた瓦礫にぶつかり、音がして瓦礫が微かに崩
れた。

砂ぼこりがハクビの姿を隠す。

この光景を見ていると、どれだけカムイの蹴りが強かつたかが窺え
る。

朝妃はただじつと二人の戦いを見ていた。

カムイは剣を背中にしまい、銃をハクビの方向に向ける。

朝妃は、その一連の行動を見てから、カムイと同じ、ハクビの方を
見た。

砂ぼこりの中、ハクビが現れる。

しかしハクビは、全く苦しい表情をしていなく、何故か顔に笑みを浮かべていた。

「やつぱ凄えなあ……カムイは。さすが有名なハンター……」

「戯れ言はいい。仲間を連れてすぐに此所から離れろ」

「……くつ敵わねえか……仕方ねえな……」

ハクビはチラ……と一瞬朝妃を見る。

目が合つた瞬間、朝妃はビクリと肩を震わせる。

「……あ……」

「そんな怯えんなよ。……カムイ」

ハクビは今度は真剣な表情になると、カムイを見つめた。

「……絶対勝つてやるから。んで……アサヒを奪る」

「はー?」

朝妃は大声を上げた。
きつくハクビを睨む。

「今は引いてやるけどねー。」

ハクビの言葉と一緒に、微かだがパトカーの音が聞こえた。

「おわーーせーべーじゅ またなーっカムイーーアサヒー」

ハクビは最後に朝妃を見て、ウインクを贈った。

朝妃はブルッと身震いして、ハクビに向かって舌を出す。

「もう一生会わないーー変態ーー」

ハクビは軽く笑うと、何処かへ飛んでしまった。

同時に、色々な場所から音が消える。

そして何も聞こえなくなり、静寂に包まれた。

その事に安心した朝妃は、大きいため息を吐いて、ふらふらと地面に腰を降ろした。

「良かつた…」

安堵の息を溢す。

カムイは銃を懷こしまつと、朝妃に向かつて歩き出した。

「カムイーーアサヒーー！」

カムイが居た場所の後ろから、レインの声がした。

砂ぼこりの中から、戦った跡など全く無いレインが現れた。

「レイン君ーー！」

朝妃は顔を上げ、レインを見る。

…と、目の前に大きな壁が広がった。
壁のせいでレインの姿が見えなくなってしまった。

ゆっくりと上を見上げると……。

「ひえっ…」

何とも眩しいカムイの笑顔を見つけた。

…美形の笑顔は素晴らしい…。

朝妃は心中で実感した。

カムイは笑顔のまま朝妃の腕を取り、立たせる。

「あ…ありがとうカムイ」

お礼を言つた朝妃の顔は、赤かった。

美形の笑顔を見てしまつたんだから、誰だつて赤くなるだろ？

頬を搔いて下を見た時…。

いきなりの浮遊感。

「うわつ…なつ…何…？」

視界が何か…てか…！

「カムイ！？何これ…！」

そう…カムイは朝妃をお姫様抱っこしていたのだ。

初めてされた事に、朝妃は顔を林檎以上に赤くする。

「降ろしてよつ！カムイ…！」

「レイン、此所の処理頼んだぞ」

いつの間にか二人の側に立っていたレインに、カムイは告げる。

「う…うん」

レインは頷き、それを合図にカムイは朝妃を抱えたまま歩みを始めた。

「ちょっとカムイー？ ねえ降ろしてよー聞いてるー？ カムイってばつ！！」

朝妃は尚もカムイに反抗した。

しかしカムイは朝妃の反抗など全く気にせず、まっすぐ前を見つめたまま歩き続けた。

そんなカムイの様子に朝妃は呆れてしまい、反抗するのを止めておとなしくする事にした。

二人が去った場所に一人、レインが居る。

「…カムイがもの凄くキレてる…朝妃何かしたの？」

…そう…カムイはキレていた。

それももの凄く。

そんな事など朝妃は知らず、ただカムイの腕の中で赤くなりながら縮こまっていた…。

この時に、無理矢理にでも逃げていれば良かったと、朝妃は後で後悔する事になる……。

第十一話 手がかり（前書き）

最初の部分は15禁といつが、そいつた表現が含まれています。

第十一話 手がかり

ドサツ

「つーちょつとカムイ！？何…」

朝妃は乱暴にソファーの上に落とされて、立っているカムイを睨み付け、文句を言おうとしたのだが…。

それは叶わぬ事となつた。

カムイが朝妃の上に跨ぎ、覆い被さつたのだ。

「カムイ…？」

何これ…何してんのカムイ…。
ねえ…何やつてんのよつ…！

「カム…ん…？」

朝妃の言葉を書き消すように、カムイが朝妃の口を塞いだ。

「やつ…カムイ！待つてってばああ…！」

ピタッとカムイの動きが止まり、唇を離す。予想外のカムイの態度に、朝妃の動きも止まった。目を丸くしたままカムイを見る。

「……あいつと何した訳？」

また美形スマイルで朝妃を見た。朝妃は一気に顔を赤くして、顔を背ける。

「そ…れは…」

言える訳ないじゃん…！
キスした何て恥ずかしい…！…てかかっこ良いからその笑顔…！
まじ止めてっ…！

「なあ…言えよ。…裏うがい？」

カムイは朝妃の髪を撫でると、次に朝妃の両腕を取り、上にまとめた。

「もう裏つてんじゃんつ……つやつ…」

カムイは朝妃の頬に唇を這わせると、空いている右手で朝妃の太ももに手をやる。

滑らかに其処をなぞる。

「ひあっ

朝妃の体がビクリと揺れた。

カムイはそのまま行為を止める事なく、顔を朝妃の首に埋める。

すると首に鈍い痛みが広がった。

「ひ……な……に……

「アサヒ……何で来たんだよ。来るなって言わなかつたつけ?」

意地悪な笑みを浮かべると、右手を朝妃の制服の中へと入れていき、ある場所で手の動きは止まつた。

其処をカムイは撫でる。

「ああー!やあっ!」

カムイは朝妃の胸に手を当て、優しく撫でると、今度は胸の突起を触る。

「んっ…あ…っ」

胸の突起を摘み、しつこく愛撫する。

その度に朝妃の体は跳ねて、甘い声を洩らした。

「はっあ…カムイっ…止めて…っ」

「止めるかよ」

制服を一気に上に捲り上げると、唇を突起に近づけ、今度は舌で愛撫する。

「ああっ…や…んん…」

痺れる感覚が体を走り、体を捻つて愛撫から逃れようとするが、その動きはカムイを煽るだけだった。

カムイは激しく突起を弄る。

唇で弄り、右手はもう一つの胸へ移動する。

「はあつ…あ…」

どちらの胸もカムイの手と唇で激しい愛撫をされ、朝妃の頭は段々と朦朧としていく。

力が入らなくて、抵抗出来なかつた。

しかし朝妃の理性はまだちゃんと働いていた。

残された理性を頼りに、朝妃は必死にカムイから逃れようと腕に力を込める。

ビクともしないが、それでも朝妃は抵抗する。

そして朝妃は、ある事を思いついた。

「……カムツ…イ…」

カムイからの返事は無く、愛撫を続けられる。

それでも諦めないで、朝妃は頭を上に持ち上げた。

「アサヒ?」

朝妃の突然の意味深な動きに、カムイは顔を上げ、朝妃の顔を覗く。

瞬間…。

「ゴチンッ

カムイの頭と朝妃の頭がぶつかる。

「いつ！つー…」

カムイの腕の力がその頭突きのせいで緩んだ所を、朝妃はカムイの手を払いのけ、腹に思い切りパンチを食らわした。

「うつ…つ…コホッ…」

カムイが苦しんだのを合図に、足をバタつかせ、何とかして足を自由にした朝妃は、その足でもう一発カムイの腹に蹴りを入れる。

低く唸つて体をよろけるカムイをきつく睨み付け、服を整えると、体を起き上がらせてソファーから飛び出た。

そのまま扉まで走り、勢いよく部屋から出た。

バタンッと大きい音がしたのを最後に、部屋中に静寂が広がる。

「う…何やつてんだよ。俺…」

カムイは一人呟くと、ソファーから立ち上がり、扉へ向かう。

こんな世界に一人は危険だと感じたカムイは、すぐに朝妃を追つた。

どんなに拒否されても、今はアサヒの身を危険に晒してはいけない。

アサヒは兄を探さないといけない。

自分が暴走してやつた事だが、俺は言った。

兄を探してやると。

だからアサヒが怒つても何でも、俺はアサヒを追う。

「決めたからな…」

軽く苦笑して、走り出す。

まだ遠くに行つてないと予想したカムイは、近くから探そつと思つた。

外に行かれてしまつてはどうしようもない。

アサヒは氣術を持っている訳じやないから。

氣術があれば氣配で見つけられるが、それは無理だ。だから急いで探さないと…。

とにかくレインにも協力してもらおう。

カムイはレインが居るだらう場所へと走つていった……。

その頃朝妃は……。

「ああもうーー！カムイの馬鹿野郎ーーー迷つたじゃんかーーー！」

ホテルで迷つていた。

「カムイがあんな事するからじやんーーー何でーーーつカムイーーー！」

あんな事したんだろう。

怒つてたのかなーーー。

でも何で？何に怒つたの？意味分かんないよつーーー！

「はあ……せつとかく仲良くなれると思つたのにな……

「れじやあ顔合わせにくいじやんか……馬鹿。

「カムイの……大馬鹿ーーーーーー！」

「煩いなあ……」

え？

「「」んな所で叫ばないでよ……あんたさつ……」

「……えつと……」

すぐ近くの部屋から、幼い男の子が出てきた。

てかあたしほんと煩かつたな。

こんな所で叫んじゃ駄目だよあたし。
人様の迷惑になるじやん。

「「」めんなさい……」

頭を下げて謝る。

「此所で叫ぶなら上で叫んでくれない？ 憲い迷惑だから」

「上へ上つて……」

「屋上の事。何、あんた知らないの？」

「屋上……あつたんだ……」

知らなかつた…。

なら屋上で叫べるねつ。

うんつ其処で叫ぼう！

屋上なら思いつ切り叫べるし…！

「聞いてる？」

男の子が怪訝そうな顔で朝妃を見てくる。

朝妃はにこやかな笑みを浮かべ、男の子に「一度頭を下げる」

「教えてくれてありがと…！それと叫んで「めんね…じゃつ」

軽やかに駆けて行こうとしたら…。

「おこつー。」

男の子に呼び止められた。

「何？」

朝妃はゆつくりと振り向く。

「お前……。……いや、やつぱーーー」

「……あつあのせつ」

何かを思い出したように朝妃は男の子に問う。

「あの……今までの中でも、涼つて名前の男の人、聞いた事ない……？」

「リョウ……？リョウなら聞いた事あるけど……」

「えつー？ほんとにー？」

「嘘ついてどうすんのさ。リョウは俺に氣術を教えてくれた人だ」

「……え？」

氣術を教えてくれた人……？それって……お兄ちゃんの訳ないな。
お兄ちゃんが氣術を教えられる筈ないし、人違いか……。

でも一応……詳しい事聞いた方が良いよね?
情報は必要だしつ！

「ねえつそのリョウつて人さ。どんな人なの？」

「は？どんな人って言われても……。リョウは博士だぜ？しかも有名
な。お前知らないのか？」

「博士ー？」

益々違う気がしてきた…。お兄ちゃんが博士の訳ない。絶対に。あり得ない。やつぱり人違いか…。

はあ…。

「リョウに会いたいの?」

「あ…違うリョウって人にね。探してるんだ…涼を…

お兄ちゃんを…。

「…博士の場所教えようか

「えつ?」

「博士は結構物知りなんだぜ。この世界の事を沢山知ってる。お前の探してるリョウって人も見つかるんじゃね?博士に聞けばわ」

……沢山の事を知ってるか…。

確かに聞いといて損は無いかも。

一応聞いとこうかな。

「やうだね。じゃあ教えてくれる?」

「ああ、分かった」

それから朝妃は、男の子に博士…リョウの居場所を教えてもらつ事になつた。

⋮

「あの子意外にいい子だつたな。博士の場所教えてもらつたし…行ってみよ」

男の子に書いてもらつた紙を見て、嬉しそうに微笑んだ。

書いてもらつた内容…。

博士が住んでいるという場所の地図と、地図。

なるべく詳しく書いてもらつた。
迷うと悪いから。

「ここの世界の人って、不良みたいな人達もいるけど、ああいう親切な人もいるんだよね。うんつお兄ちゃんが優しい人のお世話になると安心だな」

朝妃は心弾む気持ちになりながら、ホテルの玄関へと向かった。

ついでつき、自分は玄関へ行つた事を思い出したのだ。

しかも騒ぎになつてると思つから、簡単にたどり着けるだろ？。

紙をスカートのポケットにしまい、鼻歌を歌いながら玄関へ向かう朝妃なのであつた……。

第十一話 夢の幻

* カムイSIDE

「レイン！」

「あつカムイ！大変なんだよつーー！」

レインはカムイを見るなり、血相を変えてカムイに走り寄った。

レインの焦る様子に、カムイ自身も胸騒ぎを覚える。
もしかしたらアサヒに何かあつたのか…？

「来たんだよーー！奴がーー！」

「はつ…？奴？それって…？」

予想外の言葉に、ついまぬけな表情をしてしまった。とにかくアサヒに何も無いなら良い。

カムイは後はどうでも良かつた。

「まぬけな顔してないでーー！実はこのホテルに泊まつてたんだーー！
さつきホテルの人があの名前言つてたの聞いて…すぐに捕まえよう
ーー！」

「奴つて…まさかあいつかーー？」

カムイの目が大きく開かれる。

それほど奴というのは重大な人物なのか。

「でも氣術の氣配はしなかつたぞ？ わざと消してるので？」

「かもねつー部屋の番号聞いたから、今すぐ行」…ほら早く…」

急かすようにカムイの背中を押す。

しかしカムイは歩き出さず、むしろ行くのを拒んでいた。変な態度のカムイに、レインは不思議そうな顔をすると、カムイの顔を覗き込む。

「カムイ？ 様子が変だけど、どうしたの？」

「……レイン。アサヒを見なかつたか？」

「えつ？ アサヒ？ 一緒にやないの？」

「ああ… ちょっと色々あつてな、別れたんだ。それでそのまま外に出て行つたら困るし、レインはずつと玄関に居たんだろ？」アサヒは来なかつたのか？」

カムイは不安そうな目をレインに向ける。
レインも心配な表情をすると、小さく首を縦に振つた。

「来てないよ。じゃあ奴に会いに行く前にアサヒを探さないとね」

「ああ。それが先だ」

深く頷いてレインの言葉に賛同すると、一人はホテルの奥へと進んで行つた…。

「あつ階段発見！」

やつと下へ降りる階段を見つけた朝妃は、嬉しい表情を浮かべ、階段へと向かった。

どうやらエレベーターは見つけられなかつたらしい。
軽やかなステップで階段の所まで行き、また軽やかなステップで一段一段降りていく。

ふと…降りる途中で足を止めた。

朝妃の表情は驚愕の表情になつていく。
その原因は…。

「……………？」

何で此所に…。

え…？ あれは本物？

下の階… 一階のホールみたいな場所に朝妃は目をやつている。

其処で朝妃が見つけたものとは…。

「…………お兄ちゃん…なの？」

ホールの端に立っている男。…

スラッシュとした長身に、綺麗な焦げ茶色の髪。

その姿は、朝妃が良く知っている人物。…兄、涼。

しかしこんな早く見つけてしまったなど、あり得ないと思つ。でも運良く会えたのかもしれない。

とにかくあれはお兄ちゃんに似てゐる、凄く。

もしかしたら…。

そんな期待を抱いて、朝妃はいつの間にか走り出していた。

距離が縮まつていく。

あと数メートル。

1メートル。

そして…。

「…あのっー

声を掛けた。

兄であるよつに…。

そんな願いを込めて。

緊張で心臓が高鳴る。

胸の辺りをきつく握りしめ、相手を見つめる。

すると、相手がゆっくりと振り返つた。

「…………お兄ちやん……お兄ちやん……」

やつぱりお兄ちやんだった……僕えた……お兄ちやん……

やつと……僕えた……。

「お兄……ちや…………」

「…………朝妃……」

涼が朝妃の名を呼んだ瞬間、突然視界がノイズが走ったように歪んだ。

そして段々と涼の姿が消えていく……。

「えつ……お兄ちやん? お兄ちやん……」

嫌だ! ——やつと僕えたのに……消えないでお兄ちやん……

目を大きく開き、涼の名を呼び続けた時。

「…………はあ…………此所…………夢…………」

額に汗を滲ませながら、辺りを見回すと、其処は知らない部屋。

どうやら自分は夢を見ていたらしい。

「こつの間に……眠つてたの? あたし……」

覚えてない……確かあの男の子に博士のコウツで人の居場所を教え

てもらつて……それで……それで？
あたしどうなつたんだっけ？

「やだ……記憶がない……何で？あれ……？」

「気がついた？」

「えつ？……あ……さつきの……」

声がした方に振り返ると、親切にしてくれた男の子が立つていた。

「あ……あの、あたしどうして此所に面るの？訳分かんないんだけど
……」

「ああ……俺が連れて來たんだよ」

「へ？連れて來たつて……何で？」

「……お前、廊下で寝てたんだよ」

「はあ？寝てた？」

あたしこいつ寝たつけ？

いつの間に？

全然覚えてないんですけどっ！――

「ていうのは嘘で――」

男子の子の顔が呆れた顔から意地悪そうな顔に変化した。

まつまつたく状況が読めないんですけどっ！――

てか嘘つて！！何だこの子！！

「俺が眠らせて連れて来たの」

「は…はあ？ 眠らせて連れて来たって…意味分かんないんですけど…」

「…あんたさ、カムイと知り合いだろ？ 気術の氣配がしたんだよね、あんたから」

カムイ？ カムイの知り合いだから連れて來たって事？ 何の為に？

朝妃が首を傾げて考えていると、男の子が意地悪な笑みを浮かべて、朝妃が座っているベッドへと近づいてきた。

「俺…カムイと会いたかったんだよね。実は探してたんだ、カムイを。有名な…名高いハンターって奴をね」

「だからカムイの氣術の氣配がしたあたしを此所に連れて來たって訳ね」

朝妃の口調が苛ついたように尖つたものとなつた。

男の子はニヤリと口端を上げると、朝妃の頬に触れる。

「そつあんたは人質だ。奴を誘きだすね。その内此所に来るでしょ」

人質か… そんなの…。

「…それで、はいそうですかつて、納得すると思ひー…？」

男の子の手を振り払い、キッと鋭い瞳を向ける。

「あたしは人質になんてならない！！カムイに会いたいなら真っ正面から行つてくれればいいじゃん！！氣術でも使えば一発でしょ！？カムイがそれに気づいて飛んでくるわよーーー！」

「確かにそつなんだけどな。でも人質居た方が楽しそうじゃん。あんたは…カムイにとつてよつほど大切な人らしいし…？」

そう言つて朝妃の首筋に指をツウ…と巡らせる。

「キスマークなんか付けられてさ。やつたんだ、カムイと」

朝妃の顔がボツと一気に赤くなる。

それを見た男の子が、愉快そうに笑つた。

「ち…違…」

否定の言葉を述べようとしたら…。

不意打ちで軽く触れるようなキスをされた。

「……」

朝妃は目を見開いたまま固まる。

男の子は唇を離すと、意地悪な笑みを溢して、朝妃をベッドに押し倒した。

朝妃はまだ固まつたまま。

「とにかく、あんたは此所にいるんだ。変な行動を取つたら…容赦しないからな？」

耳元で囁くと、男の子はベッドから降り、奥へと消えていった。

「……な……何なのあの子はーーー！」

親切にしてくれたのに、酷くないーーー!?
キスされたし、監禁ですかーーー?

人質つて最悪なんですかーーー!

でも逃げられないーーーよね。さつき見せた顔は、何するか分からぬ。

「はあ……カムイ、レイン君……ごめんね……」

朝妃は謝罪の言葉を述べると、窓から見える景色を眺めた。

こうして、朝妃はブチ監禁される事になつたーーー。

第十二話 突入

暑い暑い夏の日。

あたしがまだ幼稚園の頃、お兄ちゃんと一緒に川に遊びに行つた。

其処であたしはドジをして、滑つて転んで怪我をしたの。

その時お兄ちゃんは、すぐ困った顔してたよね。

今でも覚えてるよ？

それだけ凄い顔してたんだよ、お兄ちゃん。

だから…早く。

早く帰つてきて、また一緒に川に行こう？
川じゃなくてもいいから、一緒に居たいよ…お兄ちゃん。

お願ひだから…帰つてきてよ…。

朝妃つて…呼んで。

「……」

「また…夢を見た。」

今度の夢は、お兄ちゃんと川に遊びに行つた夢。

お兄ちゃん……悲しいんだ。あたし。

家族がいなくなつた事が。一人もいなくなつた事が。お兄ちゃんしかいないのに…どうしてお兄ちゃんは離れていつてしまつたの？

「…ははつ重症だねこれは…」

実の兄に、こんなに惹かれてるなんて…。

「何が重症なのさ」

遠くから知つてゐる声がした。

この声の主はもぢろん…あたしを監禁している男の子。名前は知らないけどね。

「別に…あなたには関係ないじゃん。てか…いつまで此処に監禁させる気よ」

「カムイが来るまで」

「来ないよ、カムイは」

来る訳ない。だつて…。

あたしとカムイ、喧嘩してゐるから。

喧嘩つていうか…カムイがムカついたから蹴り入れて逃げてきただけなんだけど。

でもカムイは怒つてると思つ。

あの性格だとね。

「来るつて。あんたの事大切に思つてんだし、カムイなら来るね…
取り返しに」

「ふーん…その口振りだと、あなたカムイの事よく知つてゐみたい
だね」

朝妃のこの言葉に、男の子の表情が変化した。
何か楽しいものを見つけた子供のような表情…。
残酷な…笑み。

朝妃の背筋に、冷や汗が流れてきた。

「誰よりも知つてる…カムイの事ならな。てか…カムイとパートナ
ーの、あの…何だっけ? 小さい男」

「レイン君でしょ? レイン君がどうしたのよ」

「ああ…レインってあいつか…。つたくさあ…あいつなんかがカム
イのパートナーってのがあり得ねえんだよな。あんな弱つちい奴が
わ」

「ちよつと…レイン君は強いよ…? あなたに何が分かるのさ…」

何も知らないくせに文句つけないで欲しいんですけど! ?
てか見た感じあなたの方が弱つちく見えるのは気のせいじゃないよ
ね! !

「分かるつて。カムイの事ならな…周りの奴の事も、全部」

そう言つて、窓の方へと歩いていく。

窓に手を当てて、街を眺める。

その横顔がなんだか…悲しく見えてしまう。

夕日が男の子の顔にかかるつて、美しい幼げな顔が、より一層綺麗に映る。

カムイの事が分かるつて…」の子…。
もしかして、カムイの事が好きなの?
だから…そんな事言うのかな。

「…ねえ…

「来た」

「えつ? 来たつて…」

もしかして……。

「あつ言つとくけど、俺はレインつて奴殺すつもりだから。覚えと
けよ」

「は…? レイン君を…殺す?…何言つて…」

「本気。邪魔だし、カムイの隣は俺だけだから」

なんつつ… 我が儘な奴だ…!

「レイン君を殺すなんて… そんな事させない…!…言つとくけど、
レイン君はあなたより強いよ…!…ナメないでよね…!…」

「……はあ……煩い女。戦つてゐる時は邪魔するなよ」

「はあ！？煩いって……ちょっと……」

ついにキレてしまつた朝妃は、ベッドから出で、男の子の方へと向かつていく。

男の子は朝妃を気にせず、一人扉に向かつた。

扉の前でピタリと止まるど、ゆつくりとドアノブに手を伸ばす。

しかし扉は自動的に開いて、扉の向こうに居る人物を映す。

其処に居たのは……。

「……レイン君……」

レイン……ただ一人。

「は……カムイは居ねえの？拍子抜け……」

くしゃりと前髪をかきあげると、レインを見る。

男の子より背が大きいレインは、冷ややかな視線を男の子に送る。

其処で二人は静かに睨み合つて……。

空気が張りつめる。

朝妃はただ一人を見つめるしかなかつた…。

「……お前だつたのか。アサヒを連れ去つたのは」

「カムイを誘きだす為に使つたんだ。まんまと餌に引っ掛けられて、助かつたよ」

「よく言つよ……でも、甘いよ、あんた」

「は？」

スッヒレインの目付きが細くなり、それにすぐ気づいた男の子はバツクステップをする。

男の子が着地した瞬間……。

ガツシャアアーンッ!!

「……？」

大きな窓ガラスが盛大に割れた。

驚いて後ろを振り向くと、其処に居たのは…。

「…………カムイ…………」

朝妃が呟く。

カムイが、窓から侵入してきたのだ。

「…………へつ…………」

口端を上げて微笑む。

恐怖の獣が、降り立つた。

「カム…………イ…………」

息さえ出来そうもない空氣の中、一人だけ口を開いた……男の子。

カムイは妖しく……微笑した。

第十四話　思ひと想ひ（前書き）

この話から戦いが始まってこきますね。
戦闘描写は無いですが、徐々に盛り上がる予定です。

第十四話　思いと想い

ただ静かな空間の中に、ある一つの音だけが響く。

「お前、好き勝手やつてくれたみたいだな。前から頭がキレると何するか分かんなかつた奴だけど……まさかここまでするとはな」

カムイは横目で朝妃を見やると、スッと歩みを進めた。朝妃に向かって。

しかしそれは男の子によつて阻まれてしまつた。男の子が朝妃の前に立ち塞がつてしまつたのだ。

カムイはピタリと歩みを止める。

いつもの目付きではない目を、男の子はカムイに向かた。

カムイも鋭く尖つた瞳を男の子に向ける。

そこだけ火花が散つているように、朝妃は感じた。

誰も口を開く事が出来なくなつてしまい、長い長い沈黙が部屋を包む。

そして……。

どちらからともなく氣術の淡い光が溢れた。

朝妃は一瞬の事だつた為に、目の前で何が起きたのか全く分からなかつた。

激しい氣術のぶつかり音が耳に響く。

目眩がする中で、やつと状況が少しだけ理解する事が出来た。目の前で起きてる事態は……朝妃の予想を超えた。

カムイと男の子が、体に自分の氣術を纏いながらそれぞれの武器をぶつけ合っていた。

カムイは剣を。

男の子も、剣を。

二人の顔は氣術のせいで見えなかつたけど、何となくカムイの表情だけは予想出来た。

カムイはきつと、怒りの形相をしている。

凄く怒つてゐる。

それだけは分かつた。

ほんの一瞬だけ、氣術の隙間からカムイの表情が見えた。

見た瞬間、朝妃は固まつた。

鋭い目付きで男の子を睨み、あたしだつたら腰が抜けるだらう恐怖の表情をしていたから。

怖い……。

素直にそう思つてしまつた。

声も出せなくて、二人を止める事も出来ない。

止めなきやいけないのに、これから起つる惨劇を生み出さない為に、止めなきやいけないのに……。

自分は無力だ。

止められない。

止められる訳ない。

力なんて無いし、一人に対抗など出来る筈ないんだ。

「つ……」

朝妃は強く下唇を噛む。
自分の無力さに嫌気がさす。
苛々してしまう。

二人を止めたい……。
カムイを……止めたい。

必死に声を出そうと試みるが、全くと言つていい程声が出なかつた。
しかし朝妃は諦めない。

恐怖に打ち勝つて、二人を止める。
そう決めたから。

「……………つ……………力……………」

絞り出すような声。

やつと喉から出てきた。

しかし一人には届かない聲音。
もう一度……朝妃は声を出す。

「……………カム……………イ……………カムイ……………カム……………つ……………」

まともに声が出せるようになつた時、強すぎる一人の氣術のせいで
強風が吹いた。

風は瞬く間に部屋全体に広がつて、もちろん朝妃にもその風はふり
かかつた。

「きやあつーー！」

朝妃は咄嗟に腕で顔を覆う。

吹き飛びそうな強風に、朝妃はなんとか耐えた。
しかし普通の人間にこの風が耐えられる訳ない。

あと少しで吹き飛びそうになつた時、ふつと風が止んだ。

いや……風は止んでない。朝妃の周りだけ風が止んだのだ。
それに体が仄かに暖かい気がした。
ゆっくりと瞼を上げると……。

「……白い……壁」

そう。

朝妃の周りを、白い壁が囲んでいた。
正確に言うと、壁ではなく白い空気のよつたものが、朝妃を包んで
いたのだ。

朝妃はこれが何なのかすぐに理解した。

「レイン君……」

横を見れば、レインが朝妃に向かつて手を翳していたのだ。
その手に白い光を集めながら。

レインはニッと微笑むと、目線をぶつかつてゐる一人に向けた。

朝妃は、自分がレインによつて守られていると自覚すると、レイン
に微笑んだ。

二人は未だに衝突しあつてゐる。

それは誰にも止められない。

何故なら、この戦いはカムイの思いの強さが生んだ戦いなのだから
……。

第十四話　思ひと想い（後書き）

始まつてしましました！　さつとこの一人の戦闘シーンは長くなります。

と言つても次話だけだと思いますけど。

戦闘描写は得意ではありませんが、上手く書いていきたいと思います。

よろしくお願ひします。

それではまた次回も

第十五話　思いの重さ（前書き）

めっちゃ久々の投稿です！！今まで放置すいませんでしたっ！そして久々な為に、この話は暴走しています。ですが大丈夫です！！えっと、また執筆頑張りますのでこれからよろしくお願いします m

（ ） m

第十五話　思いの重さ

カムイ……あなたはビリしていつもそつやつて勝手なの？ 何も分かつてない。

ちよつとはあたしを頼れ。

カムイと男の子の氣術が衝突してゐるのをレイン君が助けてくれた氣術の中で眺める。

二人は戦いをやめる様子はない。だから見つめてるしかないんだろう。この終わるか分からぬ戦いを……。

「……レイン君、あたしも……あたしも戦いたい！」

「は？ アサヒ何言つて……」

予想外の朝妃からの言葉に戸惑うレイン。

朝妃の元に駆け寄り、やめさせようと必死に説得を試みる。

「危ないから駄目だよ！ それにこれはカムイとリウの戦いだ。誰も手を出しちゃ駄目なんだよ」

「リウ？」

聞き慣れない単語に首を傾げる朝妃に、レインはゆつくりと説明を始めた。

「リウはあいつ、あの男の子。そしてリウはカムイの元パートナーだったんだ」

「えええ！！ 元パートナー！？」

「なんと！！ あの男の子はカムイの元パートナーだったのか！！ そうなんだ……。」

対視してる。当たり前だけどね

「今は僕だけどね。だからリウは僕を敵苦笑氣味にそう言つてレインは一人を見た。

「だからリウはカムイの事を尊敬してるし、大事な存在な筈だよ。もう一度カムイのパートナーになるうとしてる」

「え……ちょっと待つて、そしたら本当は……」

「うん、戦うのは僕の方だ。でも……カムイがそれを許さないから」

「どうこう……事？」

レインは下を向き、どこか切ない表情になつた。

その表情を見て朝妃は胸が痛んだ。

もしかしたら聞いちゃいけない事だったのかもしれない、後悔した。

「…………僕よりリウの方が強い。だからだよ、カムイは今は僕を大事にしてくれるからリウと戦わせたくないんだ。結果は見えてるから」

「そん、な……そんな事ない！　レイン君は強いよ！　それはカムイも認めてるよっ！」

「どうかな……」

「大事だから、大切だから守りたいんだよ！　怪我させたくないんだよっ！　リウがカムイのパートナーになりたいって思つても、今大事なのはレイン君だから！　失いたくないから守るんだよーーー！　一緒にいたんだからレイン君は知つてるでしょーーー！」

あやふやなレインに痺れを切らしたのか、朝妃は大声でレインに怒鳴つた。

しかしレインは俯いて頷こうとしない。

どれだけ追いつめられたのか朝妃には分からぬけど、カムイがレインを誰よりも大切にしているのは分かる。

それだけカムイはレインを大切そうに見てきたから。

「カムイはレイン君の為に戦つてゐるんだよ！ 分かるでしょ！？ カムイはリウよりもレイン君のパートナーでいたいんだよつ！！」

……知つてるよ。

カムイが僕をどんな風に見てきたか、痛い程分かる。

でも比べられるのが怖くて、怯えてた。

リウの方が強いし、僕は弱い。

だから必死に力をつけて、カムイと対等になるよう戦ってきた。
カムイは笑つていつも僕の傍にいてくれた。

それが物凄い嬉しかつたんだ。

リウと戦うのは僕だ。

でも僕は負ける、弱いから。だからカムイが戦つてくれて、……でも、それが辛くて……。

「レイン君、あなたは弱くないよ」

「えつ？」

何故心の中であつた事が分かつたのだろうかと、驚きの表情を朝妃

に向ける。

朝妃は微笑んでレインを見た。

「今までの全部声に出してるから」

「あ……」

一瞬で真っ赤になるレインの顔を見て朝妃は小さく笑うと、言葉を続けた。

「カムイはレイン君を大切に思つてゐる。来たばつかのあたしでも分かつたからつほんとこ……レイン君は幸せ者だよ?」

好きな人に愛されて。

「う……」

レイン君の瞳に涙が溜まつて、あたしはそれを見てまた笑つてしまつた。

レイン君の泣き顔は初めて見たけど、美形の涙は美しい。

「ねえ、一緒にカムイを応援しようか! 絶対に勝つよ、カムイは」

確信を持つてレイン君に微笑んだ。レイン君も微笑んで頷き、カムイを見つめる。

戦いの最中だというのにカムイは至つて冷静で、二人の視線に気づいたカムイはレインを見て目を見開く。

「お前、何泣いてるんだ？」

「つ！ これは……」

カムイに気づかれて咄嗟に視線を逸らすレイン君は、とても可愛かつた。

「よそ見しちゃ駄目だつて」

ガキンッ

宙にリウが手にしていた剣が舞う。カムイがリウの剣を払つたのだ。剣は宙を舞い、勢いをつけて部屋の床に突き刺さつた。

カムイはリウの喉仏に剣の先端を当てる。

ここまでくれば結果はもう見えていた。

それを分かつてるカムイはニヤリと口端を上げる。

「終わりだな、リウ」

次の瞬間、リウは後方に吹き飛ばされ割れた窓の外へと放り出された。

そのまま下へ落ちていく。これには堪らず朝妃が声を荒げた。

「ちょっとカムイ！ 外に放り出すなんてっ！」

「心配いらない、助けが来る」

「はあ？」

朝妃がカムイを睨み付けた時、部屋全体に風が吹き渡った。しかしレインの気術に守られている朝妃には何の害もない。静かに窓の外を見つめていると、一人の男が下から上がってきた。リウを抱いて。

「……カムイ、お前は元パートナーをもこのように傷つけるのか？」

「もう元パートナーじゃないから知った事じゃない。そっちも手加減無しで来たから本気になっただけだ」

お互い冷静な口調が続く。

しかし男は諦めたようにため息を漏らすと、またゆっくりと上に上がつていった。

最後に言葉を残して。

「リウが迷惑をかけた、悪かった」

男の声はやいで消えた。

：

「で？ レインは何で泣いてたんだよ」

「だからー！ カムイを心配してだつてわしあから言つてゐじやん
！」

「そんな事でレインが泣くか馬鹿。 レイン、本当の理由は？」

後ろで騒いでる朝妃は放つておいてカムイはレインに向き直る。

レインは照れたように頬を搔くと、照れくさそうに笑った。

「本当だよカムイ、カムイが凄く心配だつたからさ……」

暫しの沈黙の後、カムイはため息を吐いて横を見た。

「言いたくないならいい」

そこでその話題は終わってしまったけど、これからも朝妃はレインとカムイについて楽しく話す事だらう。

そしてまたレインの照れた笑顔を見て笑うんだ。

和やかな空気が三人を包むんだ。

第十五話 思いの重さ（後書き）

ほんつと暴走すこませんでしたっ！！ あり得ない展開になつたりめちゃくちゃになつたりと、反省する点が多々あります……。これからは気合を入れてまた一から頑張りたいと思いますので、よろしくお願いします！！ ではまた次回お会いしましょう（^ - ^）

第十六話 これからの人

「ところでアサヒはリウに何もされなかつた?」

「うえ!？」

ふいに言われたレインからの質問にひどく動搖する朝妃。これには二人も驚いた。

「何かされたんだねアサヒ! 何されたの!?」

レインが朝妃の肩に手を置いてぶんぶん揺らす。

「あ、の、ちょっとレイン君……」

大きく揺さぶられて何も言えなくなってしまった。

必死に落ち着かせようとすると、レインは聞いてくれない。

「レイン、それじゃあアサヒ話せないから

カムイの冷静な言葉にレインはハツとして肩から手を離した。

「『』、『』めんアサヒー。」

「大丈夫……。えっと、リウには何もされてないよ」

「本当ー？ 大丈夫なんだねー？」

「うんー。」

本当はキスされたけど敢えて言わないでおじい。後が怖いから。

「良かつた……。」

「……アサヒ」

「何？ カムイ」

カムイに呼ばれて後ろを振り返ると、複雑そうな表情を浮かべた力
マイがいた。

「カムイ？」

「つ……、『』めん

「えつ？」

あまりに唐突すぎて何に謝られたのか理解できないアサヒ。しかしカムイはそのまま言葉を続けた。

「そ、の……キレイ無理矢理襲……て」

成る程。やつと朝妃は言葉の意味を理解した。
でも朝妃は笑顔だった。

カムイは不思議に思つて朝妃を見つめていると……。

「もつ氣にしてないよ」

「え……」

「何か色々ありすぎてもつこいやー……で
と笑顔だった。

「も謝つてくれた事は嬉しいよ、ありがとう」
「あ、ああ……」

何だか納得しないが、朝妃自身がいいと言つているので良しとしこづ。

「カムイ、部屋戻る？ いつまでもここにいると窓弁償しないといけなくなるよ」

「そりだな、行くか

「ええ！ 割つたのカムイなのに……」

「いいんだよ、ほら行くぞ」

カムイに急かされて急いで部屋から出た朝妃だが、やつぱり変じやないかと疑問に思つ朝妃であつた……。しかしそこは無理に納得させる。

ここは異世界なのだから、と。

：

「カムイ達はハンターの仕事明日もあるの？」

時刻は夜になり、三人でソファーでまつたりしている時、朝妃がカムイに聞いた。

レインは今お風呂に入っている。

「ああ、明日はこの街を出ようかと迷っている。もう用はないからな」

「アリなんだ……」

朝妃はある事を頼もうと思つたが、どうしようか悩んでいた。
もじもじしている朝妃に気づいたカムイが眉を寄せた。

「どうした?」

「う、えっとね……その……」

まだ言い迷つてる朝妃に痺れを切らして、先程よりも強い口調で問
いだした。

「何があるな?」

「うう……、えっと……。……あのねー。」

カムイを真つ正面から見つめて言葉を吐き出した。

「会いに行きたい人がいるのー。」

「…………は？」

「えつとー、これ見てー。」

「

そこで取り出したのは紙一枚。

カムイはそれを手に取り、中身を見る。

「リウニ、リヨウつていう博士の事を教えてもらつたの。で、その博士に会いに行きたいなつて思つて、博士が住んでる場所の地名と地図を書いてもらつたんだ」

「…………博士に会いたいのか？」

「うん……博士物知りらじいし、もしかしたらお兄ちゃんの事知つてるかもつて思つて……」

そこまで言つてカムイを見る。

カムイは眉間に皺を寄せていかにも嫌そうな顔をしていた。

やつぱり駄目か……、と落ち込んでいると、カムイからは意外な一言。

「分かった、博士の所に行いつ

「えつー!? いいのー!？」

「他に目的も無いし、俺はいいけど？」

まさか嫌そうな顔をしていたカムイから良いなんて言われるなんて思つてなかつた朝妃は、心を踊らせた。

「わあい！ ありがとうカムイ……」

嬉しくて堪らず朝妃はカムイに抱きついた。

「つー！ な、何してんだお前はつー！」

「だつてえ……」

「は・な・れ・ろー」

べりつと朝妃を自分から離す。

その時、遠くから殺氣を感じてカムイは横を向いた。

「…………」

「……レ、レイン？」

いかにも殺氣立つてますよオーラを出しているレインに冷や汗が流れたカムイ。レインはこいつと笑つて、此方に向かつて歩き出した。

お風呂上がりなので首にタオルを巻いて。

「あ、レイン上がったの？ ジャあ次あたしが入って……って、どうしたのレイン」

レインの変わり様に朝妃はすぐこきづき、説明を促すようにカムイを見た。

カムイは首を振って否定の念図。

朝妃はまたレインを見た。

「つわあーーー！」

レインは朝妃のすぐ傍まで来ていって、怖いくらいの笑みを朝妃に向けている。

これには堪らず朝妃も恐怖を感じた。

「えーと、レイン……？」

レインからの返答は無し。無言でその場が流れるかと思つたが、沈黙をレインが破つた。

「アサヒー」

「は、はーっ！」

「さつき、カムイに何したの？」

その時、朝妃の頬に冷や汗が伝つた。

…

「えつと、じゃあレインも良一つと言つたから、明日は博士の所へ
行く事になった」

「うふー！」

「はあい……」

あの後朝妃はレインからげんこつを食らい、頭のてっぺんに大きな
たんこぶができた。

そんなに力は入れてなかつたみたいだが、朝妃にとつては強力な一発だつたみたいで、涙を溜める程に。

そんな朝妃をカムイは同情且つ、何故朝妃がレインに殴られたのか不思議に思つた表情で見つめていた。

「手加減してよレイン……」

「無理」

「……」

今夜は賑やかになりそつだなど、カムイはしみじみ思つたそつな。とにかく明日の予定も決まつた事だし、三人はそれぞれの寝床についた……。

第十六話 これから二人（後書き）

またまた投稿できて嬉しい雨音です。次回は話ががつぽり動く予感……。ではまた早く投稿できるように頑張りたいです。それでは次回でお会いしましょう!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5312c/>

君とズット

2010年12月19日02時33分発行